

日本川崎病研究センターニュースレター

(No.15) 2008.1.1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター

緒言 川崎富作

新年おめでとうございます。

「また一つ年はとるとも玉手箱、開けてうれしき今朝の初雪」と昔の人は詠みましたが、東京の正月から雪が消えて何年になるでしょう。これも地球温暖化現象の一環と云えましょう。京都議定書に署名を拒否したアメリカが本気で反省しない限り残念ながら、この現象に歯止めはかからないでしょう。

今回のニュースレターには久しぶりに柳瀬義男君の痛快な毒舌にふれることができ「早蕨(さわらび)が握り拳(こぶし)を振り上げて、山の横面(よこつら)春(張る)風ぞ吹く。」の古歌を思い出させてくれました。

いずれにせよ、新年にあたり、朗報を皆様にお届け致します。昨年11月2日金曜日、当センターにて、「新川崎病原因究明研究チーム」が発足しました。ご承知のように、川崎病の原因を解明して、治療法、更に予防法を確立して川崎病から子どもたちを救うことを目標に当センターは発足しました。しかし、仲々よいアイデアが浮かばず、研究チームの結成を今日まで見送ってきましたが、今般国立感染症研究所ウイルス第一部の主任研究官の水谷哲也博士を中心に長年川崎病の臨床面から本症の研究に打ち込んで来られた上村茂、佐地勉、横田俊平、小川俊一、石井正浩、寺井勝、鮎沢衛、土屋恵司の諸氏(敬称略)、および昨年川崎病の遺伝子の研

究で成果をあげた理化学研究所の尾内喜広氏、長年病因追求をされている国立育成医療センター阿部淳氏と共に、有力な研究チームが出来ました。

この切っ掛けは当センターの平成19年度の川崎病研究の公募研究に水谷先生が応募されたことに始まります。水谷先生らは2007年2月新興・再興ウイルスのような未同定のウイルスの遺伝子情報を得るための新しい検査方法(Rapid Determination System of RNA viruses: RDV法)を発表しました。このRDV法は遺伝子配列に頼らない非特異的な増幅と遺伝子をクローニングしない新しいダイレクトシーケンス法を特徴としていて、わずか2日間でRNAウイルスの遺伝子配列を得ることができる画期的な方法とのことです。この方法を用いて川崎病児およびその家族の血清・血漿・血球・咽頭ぬぐい液等から核酸を抽出して、RDV法およびRDV法とメガパイロシーケンス法(一度に大量の塩基配列決定を行うことができる。)を組み合わせることにより、既知・未知のウイルス遺伝子配列を決定するというものです。このような研究過程で、原因ウイルスの候補が得られた場合には更に血清疫学的手法を用いて原因ウイルスと特定できるか否かを検討することです。

科学(人間を含む自然の謎に挑戦して新しい一般法則を発見する学問)の方法論には演繹法

と帰納法の2つがありますが、前者は天才的才能の持ち主が可能で、私のような凡才には後者で地道に歩み、試行錯誤を重ねながら行動するしかないと考えます。今回の「新川崎病原因研究チーム」の今年度の活躍を温かい目で見守って行こうではありませんか。

前のニュースレターNo. 14 で恩師神前章雄先生(100歳)の訃報にふれましたが、先般2007年12月12日恩師内藤寿七郎先生が101歳の天寿を全うされました。私は昭和24年12月下旬、当時の千葉大学小児科佐々木哲丸教授の紹介状を持って、千葉から東京渋谷の日赤中央病院小児科部長内藤寿七郎先生を訪ね、同じく副部長の小久保裕先生と共に面接を受けて、翌年(昭和25年)1月4日(正月明け)から勤務するように命ぜられました。これは昭和24年8月、内藤先生が愛育病院から日赤中央病院に転ざられ、大勢の患者さんが先生と共に愛育病院から移動し、今迄のスタッフでは対応できなくなったので、急遽医員を増す必要に迫られ、千葉大佐々木教授に依頼されたのでした。あとでわかったのですが、内藤先生が東大小児科に入局したとき佐々木先生は医局長で新入局員の面倒を見る立場にあったので、お二人には親密な関係があり、医員の派遣を頼み易かったと思われます。この佐々木先生と内藤先生との関係で私は千葉大の医局から全く関係のなかった日赤中央病院小児科に勤務し、内藤先生に師事することができたわけです。全く人生とは運命的といえましょう。爾来50有余年、内藤先生の警咳に接して今日に至りました。ここに先生の長年のご活躍に敬意を表し、ご指導に深い感謝の念を捧げます。
合掌 (当センター理事長)

Japan Kawasaki Disease Research Center

「原因は何故分からないのか」

柳瀬義男

「安倍首相が突然の辞任、政権投げ出し」「民主党小沢代表、辞任表明から一転続投」

07年のわが国の政治ときたら田舎劇場の三文芝居のようで、見せられている側の観客は、たまったもんじゃありませんよねえ。民主党代表の小沢一郎氏といえば「壊し屋」の異名をとる豪腕政治家。一方考えてみればこの私、「壊し屋」ならぬ「けなし屋」だったのだなあ、つくづく思ったりします。

川崎病が79年頃より流行するにつれ、以前から提唱されていた「溶連菌」説「リケッチア」説に加え、「ダニ」説「プロピオニバクテリウム」説など新たな原因説が次々と発表されました。新説がでると、発表者のお偉い先生にむかって「この疾患の全体像を考えると、そのような原因説は成立し難い。新説というより珍説と呼ぶにふさわしい」などと臆面もなくぶちまかしていたものでした。

そんな私の行状に、ある高名な先生は「君は他人の研究にケチばかりつけているが、ネガティブ思考はよろしくない」と仰せられ、また学会場で討論を聞いていたある科学ジャーナリストは「あちら(提唱者)の態度の方が真面目だし、話ぶりにも説得力が感じられるんですがねえ」とのたもうたものでした。

オイオイ、見た目でものを言ってくれるなよ。それじゃ何かえ、オレの話は嘘臭いってえのか。原野商法にしたって、マルチ商法にしたって、良さそうな話がインチキだったなんてこと古来いくらもあったじゃあねえか。口が悪いのは生まれつきなんだよ。それに、ケチばかりつけてるっていうけど、やりたくてやってんじゃあねえんだ。ボス(川崎富作博士)の指示なんだか

ら、仕方ねえじゃあねえか。などという調子で、毎晩（当直日以外）ヤケ酒を医局であおっておりました。

何が本当で何がウソか。いかがわしい人物が語る胡散臭い儲け話の類でなく、自然科学の分野において、有名大学を出て地位も名誉もある科学者が権威ある雑誌に発表すれば、即ちそれは本当だと一般の方々は思うでしょう。ところが必ずしもそうではありません。

思い出されるのが、韓国の胚性幹細胞（ES細胞）疑惑事件でしょう。ソウル大学の黄（ファン）教授が05年、患者の皮膚細胞からES細胞11株を作成したと英文の科学誌サイエンスに発表したのです。サイエンス誌といえば、その掲載にあたっては論文審査も厳しく、ノーベル賞受賞の対象になる論文などの発表の場でもある、権威あるジャーナルです。

黄教授の発表が本当なら、事故や病気で損傷した組織を自分の細胞でバンバン治せるという、究極の夢の治療法への道が開ける訳です。ところが色々調べたら、結局このデータは黄教授が主導したインチキと判明したのです。この研究には韓国政府が75億円もの巨額の支援をした、まさに国家の威信をかけた大プロジェクトです。この疑惑に対して韓国では、黄教授の所属するソウル大学が調査委員会を設置し、自身の手で身内の研究者の捏造を認定したのです。科学立国を目指す韓国は一時その評価を下げましたが、その自浄能力をもまた示したといえましょう。

一方、川崎病原因究明ではどうだったでしょうか。以前、川崎病のある原因説の追試を、ある偉い先生にお願いしたことがありました。その先生は、最初このプロジェクトに大いに乗り気でしたが、追試の結果が否定的になると「研

究発表に際して、自分の名前ははずすように」と仰せになりました。要するに下っ端だけで発表するのはかまわんが、研究部門のチーフとしてのお墨付きを出す訳にはいかん、ということです。何故そんなことを言うのかと考えましたところ、その原因説の提唱者と追試をした施設の偉い先生とは、同じ大学の出身だったという訳なのです。同窓生の顔を潰すようなまねはできん、武士の情けじゃということなのでしょうが、サイエンスに学閥や武士道(1)の精神とは、ちと違うんじゃないでしょうか。間違いは間違いだという事実を認めねば、次のステップを踏み出すことはできません。科学に対する謙虚さと厳しさがなければ、真実にはたどり着けません。

川崎病の原因はどうしてわからないのか、とたずねられます。微生物の検出にしても、毒素の抽出・精製にしても、DNA解析など分子工学的方法にしても、その技術的進歩には目を見張るものがあります。それらを駆使してなお不明ということは、原因にたどり着く思考プロセスすなわち病因論の組み立てが、正しくなかったということになるのでしょう。

口の悪い友人が「そんな大それたテーマを、オマエのようなレベルの者がやってるのが、そもそも間違いの元だ」と言っていました。これには反論の余地はありません。

現在、私は「けなし屋」を廃業しております。スイマセン、スイマセン、スイマセン。（坂上二郎調にあやまる）（元日赤医療センター小児科副部長）

ニュースレターNo.15をお届けいたします。
ご意見ご感想をお寄せください。

事務局から

【センター日報】

- 平成 19 年 4 月 27 日 平成 19 年度第 1 回理事会開催 6:00pm～（於:当センター）
平成 19 年 6 月 9 日 平成 19 年度第 2 回理事会開催 12:30pm～（於:東京 YWCA）
平成 19 年 6 月 9 日 平成 19 年度総会と研究報告会および懇親会開催（於:東京 YWCA）1:00pm
各年度の事業報告及び会計報告、次年度の事業計画及び予算計画は総会議事録と共に
当センターでいつでも閲覧できますので、お気軽にお立ち寄りください。
平成 19 年 10 月 19 日 平成 19 年度（財）生存科学研究所川崎病研究会・平成 19 年度第 3 回
特定非営利活動法人日本川崎病研究センター理事会合同会議開催 5:00～（於:生存科学研究所）
平成 20 年 3 月 7 日 平成 19 年度第 4 回理事会開催予定（於:当センター）

【特定非営利活動法人日本川崎病研究センター会員総数 283】平成 19 年 12 月末現在
[正会員：108 名、3 法人、4 任意団体]：[賛助会員：163 名、4 法人、1 任意団体]

【研究会・講演会】

- ★ 第 32 回近畿川崎病研究会 平成 20 年 3 月 1 日（土）13:00～ 於:テイジンホール
会長:中川雅生先生（大阪市立総合医療センター）
- ★ 第 28 回東海川崎病研究会 平成 20 年 6 月 14 日（土）14:00～ 於:愛知県医師会館
地下 1 階「健康教育講堂」 当番世話人:柴田元博先生（社会保険中京病院小児科）
- ★ 第 21 回関東川崎病研究会 平成 20 年 6 月 21 日（土）15:00～ 於:日赤医療センター
事務局代表:今田義夫先生（日赤医療センター小児科）
- ★ 第 28 回日本川崎病研究会 平成 20 年 10 月 17-18 日（金・土）於:札幌医科大学講堂
会長:富田英先生（昭和大学横浜市北部病院循環器センター小児科）
- ★ 第 9 回北海道川崎病研究会 平成 21 年 9 月予定（平成 20 年度は第 28 回日本川崎病研究
会と重なるため休会） 代表世話人:濱田勇先生（札幌医師会夜間救急センター）
- ★ 第 9 回国際川崎病シンポジウム 平成 20 年 4 月 10～13 日 於:Taipei, Taiwan
問い合わせ先：日本川崎病研究センター Tel:03-5256-1121, Fax:03-5256-1124
- ★ 「川崎病の子供を持つ親の会」問い合わせ先： Tel:044-977-8451 浅井 満

新会員募集にご協力ください!!!

正会員 年会費 20,000 円

賛助会員 年会費 5,000 円

【川崎病に関するご相談】

当センターでは、川崎富作理事長が川崎病に関するご相談を受けております(無料)。お電話お手紙、Fax 等でご相談をお寄せください。月曜日～金曜日(木曜日を除く)：午後 2 時～午後 4 時

特定非営利活動法人日本川崎病研究センター
〒101-041 東京都千代田区神田須田町 1-1-1 久保キクビル 6 階
Tel:03-5256-1121 Fax:03-5256-112

日本川崎病研究センターニュースレター

(No.1) 2001.1.1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター